

## ケアマネジャーの視点から現場の声を大にして伝えたい

去る12月5日、参議院議員会館で開催された「ケア社会をつくる会」主催の院内集会に参加しました。現在 2027 年度の制度改正に向け、介護サービス利用料2割負担の拡大、ケアプランの有料化、要介護1・2の生活援助サービスなどの給付外し（総合事業化）という3つの大きな改定案を含めて議論されています。

集会に参加し、改めて強く感じたのは、国の進める数字上の議論と、私たちが目にしている現場の現実が大きく乖離していることです。私が担当する利用者さんの多くは、限られた年金の中で、1円単位の節約をしながら一生懸命に、そして真面目に日々の生活を営まれています。「これ以上負担が増えたら、デイサービスの回数を減らさないといけないね」と、寂しそうに話す利用者さんの顔が浮かびます。そんな方々にさらなる負担増を強いることは、もはや「制度の維持」ではなく「生活の質の低下」を招くと危惧しています。



利用者さんとスタッフ創作の  
寒椿と雪うさぎのタペストリー

この集会后、利用料2割負担対象の拡大はペンディングに。ケアプランの有料化や要介護1・2の総合事業化は、介護保険利用の初期の段階での適切な介入を阻む高い壁となるでしょう。費用負担を懸念して相談を控えれば、状況が悪化してから発見されるケースが急増します。早期に専門的な支援を届けることで重度化を防ぐという、介護保険本来の「自立支援」の理念が、今まさに足元から揺らいでいます。財政の理屈でサービスを削るのではなく、いかにして今の安心を支え続けるかという視点が、今こそ求められています。

今回の集会で、全国の仲間たちが連帯して声を上げる姿に強く勇気づけられました。私たちケアマネジャーの役割は、単なる手続きの代行ではありません。利用者さんのささやかな生活と尊厳を守り抜くことです。真面目に生きてきた高齢者が、経済的な理由で必要なケアを諦めることのない社会を維持するために、これからも現場の「生の声」を届け続け、だれもが安心して暮らせる未来へ向けた粘り強い働きかけを続けていきたいと、強く感じました。

ケアプランえん 松縄和代